

名家連ニュース

令和5年11月2日(木)
発行：特定非営利活動法人
名古屋市精神障害者家族会連合会
会長 池山 豊子
TEL/FAX(052)846-5576 NO.965号

◆◆ 第33回「晴れときどき虹」報告 ◆◆

第33回「晴れときどき虹」が、10月29日(日)鯉城ホールで開催され、参加者は129名でした。オープニングは、もりやま総合心療病院の皆さんによるミニコンサートでした。主催者を代表して、名家連の池山豊子会長と名古屋市健康福祉局の高木慶太主幹が挨拶されました。入谷修司先生(桶狭間病院藤田こころケアセンター脳科学研究所・所長/藤田医科大学客員教授)が「発達障害―『障害』って誰が言った!?と題して講演されました。



「発達障害」の、「障害」という言葉はそれでよいのか。発達障害は本当に増えているのか。

根本治療が可能な病気に比べて精神科の治療は難しい。その理由は、脳はとても複雑でその中で起きていることはまだわかっていないためである。

1938年ドイツの医学者アスペルガーが、自閉症は生まれつきの脳の障害であることをはじめて示した。当時のドイツはナチスの時代で優性思想が国を支配していた。ドイツに役に立つ人材かどうかで価値が決められた時代にアスペルガー症候群の概念ができた。

1988年、英国の精神科医ローナ・ウィングは重度から高機能までの自閉症をスペクトラムとしてとらえる概念を提唱した。娘が自閉症であったことから「正しく社会的サポートが受けられるように」「境界線を設けることのないように」という願いで家族会を作った。

発達障害は、増えていることが国内外で報告されている。しかし、これは診断基準の影響が大きく、病気そのものが増えているとは言えないと思う。アレン・フランセスは診断マニュアルを作成する一方で、診断のインフレによる精神医学の拡大する境界を警告し、また精神科薬の乱用を警告している。

障害は社会がつくるもので、その時代に要求される画一化された人物像から外れた人々を排除するためのことばである。世の中の寛容さがなくなると、共存ができず、排除の力がはたらく。

発達障害では二次的精神障害が引き続きおきやすく、発達障害の次にある社会からのバッシングこそ治療が必要である。

ブレインバンクは亡くなられた患者さんの篤志にもとづいて、研究のために脳を提供(献脳)して頂く活動である。脳のことをよくわかれば、病気をなおすことに近づくと考えている。

質疑応答では8名の方の質問がありました。それらに対する先生のお答えが大変印象に残りました。

・発達障害は障害ではなくて特性であり、不寛容な社会こそが障害である。治さなくてはならないという考えを一旦忘れても良い。

・家族間でもめることがある。お互い我慢し続けるとストレスがたまる。家族の事情は千差万別であるので自分たちで自分たちに合った我慢せずに済む方法を探さしかないとと思う。

・細かな検査と言えども、複雑な現象の一つの尺度で測った結果に過ぎないので、それですべてが分かるものではない。

・家族が元気にならないと本人も元気にならない。

・孤立しないことが大事である。家族会や自助グループにつながることも一つの方法だと思ふ。

・病気や特性を分析するよりも、今一番楽しいことを追求した方が良いのではないかと。

(文責 広瀬)